

### 携帯電話の音声認識機能を用いて構音訓練を行った 頭部外傷後遷延性意識障害患者の一例

○中村 千恵<sup>1</sup>、酒井 那実<sup>1</sup>、加藤 玲子<sup>2</sup>、村川 孝彰<sup>2</sup>、伊藤 純一<sup>2</sup>  
池場 亜美<sup>1</sup>、榎林 優<sup>1</sup>、浅野 好孝<sup>1</sup>、篠田 淳<sup>1</sup>

<sup>1</sup>木沢記念病院 中部療護センター

<sup>2</sup>木沢記念病院 総合リハビリ部

【はじめに】中途視覚障害の既往があり、頭部外傷受傷後、四肢麻痺と構音障害を呈した症例を経験した。音声認識機能を用いた構音訓練を行ったので経過を報告する。

【症例紹介】40代男性。30代の頃、両側網膜色素変性症により中途全盲となる。X年に交通事故にて受傷。頭部MRIにて瀰漫性軸索損傷を認めた。受傷336日目に当院転院となる。

【経過】転院時は最小意識状態。その後、徐々に意識障害の改善を認め、受傷474日目に発語がみられたが重度の痙性構音障害により発話明瞭度は4程度。呼吸、発声練習を実施するも消極的な発言が多く、意欲低下を認めた。受傷637日目に「iPhoneを使いたい」と訴えがあり、構音機能、意欲向上を目的に音声認識機能を利用した呼称課題を実施。当初は声量低下や音の歪みにより目標語が認識されなかった。しかし、継続して訓練に取り入れたことで意欲向上を認め、言語訓練全般に積極的に取り組んで頂けるようになった。徐々に声量増大し、日常会話での発話明瞭度は3に改善。四肢麻痺に関してはわずかに随意性が出現しているものの、実用性には乏しい状態である。

【考察と展望】本症例は重度構音障害により意思疎通に支障をきたしていたが、訓練に対する意欲が低く機能改善に難渋した。しかしiPhoneを使用した課題を取り入れたことで発語意欲が向上し、言語訓練全体への積極性が増した。また機器による音声認識は対人と比べより正確な構音や十分な声量を求められ、自身の構音障害に対する症状理解が進んだ。これらの要因が本症例の構音機能の改善につながったと考えられた。今後も構音訓練を継続していくことで、他者との円滑な意思疎通が可能となり、更なるQOL拡大が期待される。